

福祉の画龍点睛

——創刊に当って——

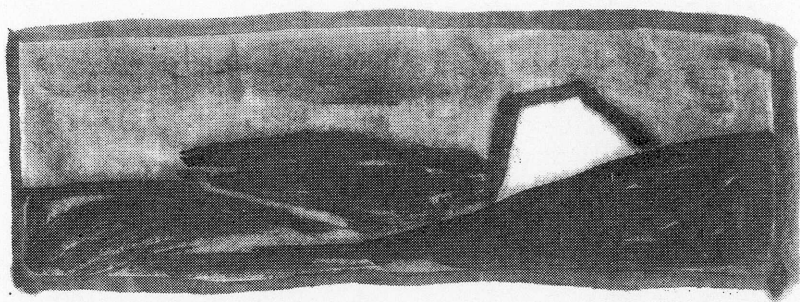
佛敎大学学長 藤 原 了 然

民主主義の謳歌をきいて年久しい。この間、すでに三十年を闊みしているわけであるが、実際にはそれだけの成果を認めるにやぶさかではないが、一面、本来の民主主義の実現ということに向っては、その道は険しくも亦た遠いようでもある。

この民主主義運動の一環として、昨今とくに社会福祉の声はなほださかんなものがある。誰れがいったのか、昭和四十八年度は福祉元年と呼ばれている。もともと、広い意味で人類文化の形成と歩を同じくすべき福祉ということが、今さらのように声高らかに強調されるというのも妙なことであるが、それにしても遅まきながらでも、福祉ということが、国家的問題として、大きく取り上げられるに到ったことは、まことに喜ばしいことである。

一例をあげていうならば、今年度(昭和五十年度)の国家予算における、福祉に対する取りくみ方、その予算額の他の予算額に対する比重といったものは、画期的(従来に比してではあるが)なものがあるようである。

しかし、すでに一部でささやかれているように、現在の如く、福祉に関する



法規の整備、並びに福祉予算の増額といったことのみでは、福祉の本当の実をあげるのには充分ではないようである。いいかえれば、福祉に関する法規や予算の運営に当って、精神的なものの欠除が痛感されるということである。

わが佛教大学は、その建学の精神である佛教精神を大学教育の支柱とするものであるが、特に、社会福祉ということを当面の学習研究の課題とする社会福祉学科においては、時代の要求と佛教精神からにじみ出る人間愛とが、恰もよくマッチしてフクイクたる異彩を放っている。その一端を物語るものとして、すでに、佛教大学では佛教社会事業研究所が設置されて営々として、少規模ながら真摯な研究がつづけられて来たのである。

今回、この佛教社会事業研究所が、その理念と実践を結ぶ、「佛教福祉」なる研究誌を創刊してこれを世におくことになった。まことに時宜に適した試みと称してよい。執筆者はそれぞれ斯界の権威者を網羅して、回を重ねて更らに刊行を続ける予定であるが、福祉活動には常に佛教精神が伴うところにこそ、真の福祉の画龍点睛があるとする所信に立つ、この種の研究が、前途多岐多端を想わしめられる社会福祉の展開に向って、かぼそくとも清纯にして明浄な燈火となることを信じて止まないものがある。

この誌の成るに際して、各方面から寄せられたご好意とご指導に感謝すると共に、佛教社会事業研究所長秦隆真先生をはじめ、編集を直接担当して頂いた所員の皆さまに衷心より深謝するものである。